

2015年2月1日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 21 章 10～19 節

説教：忍耐によって

1 これから起きること

1) 戦争と自然災害

人々は、すばらしい石で造られた神殿の建物やきらびやかな奉納物を見て驚きの声を上げていました。その様子をご覧になっていたイエスは、あなたがたの見てこの神殿はやがて完全に崩されていくのだと告げます。人々は不安になり、いったいそれはいつ起こるのか、どんな前兆が起こるのかと質問します。そこでイエスは三つのことを挙げていきます。一つ目は、「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる。」二つ目は、「大地震があり、方々に疫病や飢饉が起こり、天からのすさまじい前兆が現れます。」

今や新聞を開けば毎日のように戦争やテロ、自然災害の記事が目に入ってきます。信仰のない人でも、イエスのことばは間違っていないと感じるでしょう。

2) キリスト者への迫害

そして三つ目は 12 節と 17 節にあります。「しかし、これらのすべてのことの前に、人々はあなたがたを捕らえて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出すでしょう。」「わたしの名のために、みな者に憎まれます。」

たとえば町を歩いていきなりテロ集団に襲われたとしましょう。あるいは地震で被害を受けたとしましょう。テロも地震も、自分には責任がない、運悪く巻き込まれてしまったと言い張ることはできます。

しかし三つ目のことはどうでしょう。信仰をもつことに決めたのは自分ですから、クリスチャンであるがゆえに迫害される、人々から憎まれる、裏切られることがあっても、運が悪くとは言えなくなる。すべて自分の責任になります。こんな苦しみにあうくらいなら信仰を持たない方が良いのではないか。信仰をもって何の徳があるのか。疑問に思う方は当然いるだろうと思います。

2 我慢して自分の力で勝ち取る？

神は私たちが愛していると言いのなら、私たちが苦しみに会うことがないようにと、どうして神は守ろうとしないのか。そう考えたくありません。19 節には、「あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます」とあるので、最後は勝利に終わるという希望は確かにあるかもしれません。とは言え、勝利に至るまでには、大変な苦しみが続きます。もしかして不当な裁判にかけられるかもしれない。もしかして迫害を受けるかもしれない。もしかして信仰をもっているがゆえに、両親にも、兄弟にも、親族にも、友人にも裏切られるかもしれない。親や心の底から信頼していた友人に裏切られたなら、心が折れてしまいます。

パウロは第二テモテ 4 章 7 節で、「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました」と告白しています。彼は、若い時にはパリサイ人としてエリートコースを歩んでいた人でしたが、よみがえられた主に出会うという劇的な体験をしてキリスト者に変えられました。その後、伝道者とし

て働くのですが、そこで人に裏切られ、盗賊に会い、乗っていた船は難破し、何度も死ぬ目に遭いました。迫害もたびたびでした。そんなパウロですから、「私は勇敢に戦った」と言っても説得力はあります。

でも、私たちはどうでしょうか。迫害にあっても信仰を守り通せるのだろうか。あるいは迫害というような大きなことでなくても、たとえば仏式の葬儀に出席する時、キリスト者として信仰を証しできるのか。そういう戦いは経験します。僧侶が「礼拝ください」と言った時、どうするのか。あるいは、「ご焼香ください」言われたら自分はどんな態度をとるのか。そんな迫害とも呼べないようなことでも、キリスト者として証しができるか自信がありません。まして本当の迫害に会ったなら忍耐できず、信仰はどこかに吹っ飛んでしまいそうです。そんな人はいのちを勝ち取ることができない、そういうことになるのでしょうか。

もちろんそんなはずはありません。神は私たちのことをよくご存じです。耐えられない試練を与えないと言われるのですから、私たちができないことまで求めることはありません。パウロは、「私は勇敢に戦い、走るべき道りを走り終え、信仰を守り通しました」と自信をもって言ったかもしれませんが、それはパウロだからということでしょう。パウロと比べる必要はありません。少なくとも私はパウロのようにはなれません。

3 イエス

1) 「わたしの名のために」

では、イエスが「忍耐によって」と言われたのは、どんな意味であったのか。そのことを考える時、ヒントとなることばがあります。

12節と17節に繰り返されている「わたしの名によって」という表現です。これはどんな意味でしょうか。「キリストを信じる信仰」というくらいの意味でしょうか。間違いではありません。でももしそうなら、もっと別の言い方もできるはずで、わざわざ「わたしの名によって」と言うからには、何か深い意味がありそうです。

2) イエスの名とは

私たちはお互いに名前呼び、名前を聞いただけでその人の姿や顔かたち、性格などを頭に思い描きます。名前を聞いただけで、その人と自分とがどんな関係なのか、親しい間柄なのか、あるいはちょっと距離がある関係なのか、そういうことが思い浮かんでくる。

こうしてみると名前には二つの働きがあることになります。一つは、その人の性格や人格を現す働き。もう一つは、その人と自分との関係を思い起こさせる働きです。

そうしますと、主が「わたしの名」というとき、二つの意味が込められていることになります。一つは、主ご自身をあらわす名前。これは何も説明がいらないでしょう。二つ目は、主と私たちとの関係を思い起こさせる、そのような働きです。では、主と私たちはどんな関係にあったのか。それを見ていくことにしましょう。

3) イエスと自分との関係

別に難しいことではありません。実はすべてここに書かれています。12節。「しかし、これらのすべてのことの前に、人々はあなたがたを捕らえて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出すでしょう。」

この文章は直接にはやがて私たちの身に起こることを語っていますが、よく見ると、主ご自身が経験されたことです。主は捕らえられ、迫害を受け、ヘロデ王の前に、ポンテオピラト総督の前に引き出され、裁判にかけられました。

16, 17 節もそうです。「しかしあなたがたは、両親、兄弟、親族、友人たちにまで裏切られます。中には殺される者もあり、わたしの名のために、みなの方に憎まれます。」主は、弟子の一人であったユダに裏切られ、信頼していた弟子たちに捨てられました。人々は当初イエスを喜んで迎えたのですが、結局、十字架につけられると、手のひらを返すようにして主を憎みました。「中には殺される者もあり」と、まるで他人事のように言っていますが、これは主ご自身のことではないのですか。

「わたしの名」とは、このような名前です。捕らえられ、憎まれ、捨てられ、殺されていく方の名前。誰が殺したのですが、誰が見捨てたのか。私たちです。そうしますと、主の名前は何を現すのか。私たちの立場から言えば、「私はこの方を見捨て、憎み、十字架で殺した。」そのような関係を表す名前です。

ではイエスの立場から言えばどんな名前でしょう。神の子を殺した私たちをさばく名前でしょうか。いいえ、かえって私たちのために祈ってくださいました。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ 23 章 34 節)

4) 苦しみを通って望みへ

そうしますと「忍耐によって、自分のいのちを勝ち取りなさい」は、私たちが努力する

ことではなくなります。この方は私たちが見捨てて憎んで殺そうとした時、忍耐されました。十字架でいのちをお捨てになる時も、父なる神が必ず自分をよみがえらせてくださると信じ続け、三日目に死からよみがえり、自分のいのちを勝ち取って行かれました。

まとめましょう。キリスト者であるからすべての苦しみから守られる。そのようなことはありません。主は言われました。「わたしの名」のゆえにあなたがたは苦しみを味わうことになるだろう。でも、自分ひとりが苦しむではありません。私たちが苦しむならば、主も十字架と一緒に苦しんでおられるのです。苦しみを共にしてくださっているのです。それが「主の名」に込められた意味です。

あまりのつらさに、「もうだめかもしれない、もう耐えられない」と思う時があるかもしれません。でも気落ちすることはありません。主の名前が私たちを守ります。この方が私たちの代わりに忍耐してくださるからです。「もう私は駄目です」と弱音を吐いても結構。主が守ってくださいます。あなたがたの髪の毛一筋失われてはならない。そこまで言われるのです。主の御手が完全に私たちを守ります。

そのようなすばらしい主の名が、私たちに与えられていることの幸いを覚えたいと思います。